



巻頭言

月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ(2)

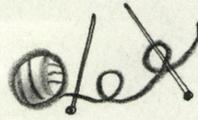
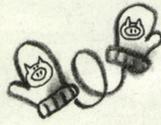
—「保育史」という視点を日ごろの保育に—

浜口順子

「保育史」という視点

『幼児の教育』が、一九〇一（明治三四）年に創刊されてから一一〇年になります。前号から第一一〇巻に入ったのを機に三回にわたり「特別号」を組むことにしました。今号はその二回目になります。

今回の「アーカイブズ特集」では、保育者自ら保育カリキュラムについて語る記録が扱われています。戦争で焦土と化したわが国が平和な社会を築いていこうとしていたころ、また、高度成長期に入り知識や技術を子どもに上から注入する教育が勢いづいてくる中でも、乳幼児保育の現場では、吹きつけるその時代の逆風から子どもを守り一人ひとりの子どもがその子らしく生きられる環境を工夫して作っていました。幼稚園、保育園、国



公立、私立の違いはあっても、このような過去の保育者たちの業績の上に現在の保育があり、今、私たちが頭を抱えて解決策を模索している保育上の諸問題が、昨日今日始まったものではないことを実感させられます。

大学の授業で学生たちに、本誌に掲載された戦前戦後の論文や保育記録などをコピーして読ませると、とても興味をもちます。昔の保育論と今の保育論の違いを感じると同時に、共通に流れているものを見いだしたり、また過去を踏まえて今があるということに気づいたり……。言ってみれば当たり前のことなのですが、昔の保育を過去の文脈の中で実感する経験は、意外にも、現在の保育者養成や教育・発達を専門とする学部教育においても決して重視されているとは言えません。過去を踏まえるというと、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどの歴史上著名な人物について教わることに勘違いする傾向があるようです。それも大切ではありますが、その人物たちはその時代に生きていたのであり、その時代が抱えていた保育・教育の問題のただ中で格闘していた人たちであったということが忘れられては意味がないでしょう。そして、それにもまして、過去においてどれだけ多くの名もなき人たちが、どのような苦勞をし、迷い考えながら保育実践をし、よりよい保育を追求してきたのかということをも肌身で感じる想像力が、保育や幼児教育の学びをよりおもしろく豊かなものにするに違いありません。



「保育史」を伝える「保育誌」

お茶の水女子大学図書館では大学における教育研究成果のレポジトリ（ＩＴ保管）化を進めており、二年ほど前から『幼児の教育』誌の一〇〇年分以上にわたるバックナンバーもすべて電子データ化し、インターネットでいつでも誰でも自由に読めるシステムを作りました（ただし最近三年間のもは未公開です）。

試しに「食」という言葉を検索してみましょう。今でこそ「食育」という熟語と切っても切り離せない言葉ですが、食育基本法が施行される二年前の二〇〇三年、小川清実氏は厚生労働省が「食を通じた子どもの健全育成」のことを「食育」と呼び始めたことを受けて、「私にとっては『食育』という聞き慣れない言葉であるが」（乳幼児期の『食』を考える(1) 第一〇二巻第十二号 p.11-12）と論じています。当時、私自身も感じた「食育」という語への違和感を思い出します。

「食」から検索された記事は全部で十四件でしたが、最も古いものは本誌が創刊された年、一九〇一年の飯島八千溪氏という信州伊那出身の人による「食はず嫌い」という投稿記事です（第一巻第十号 p.55-56）。「食物の好き嫌いわ、全く、我儘わがままから来るので、一年三百六十五日、此位このくらい親に迷惑を掛け、心配させる事わありません」という一文から始まり、麦のおいが嫌で食わず嫌いをしている娘が栄養不良で病気になるが、行者に



拝んでもらったら、神様のバチが当たるのが怖くて食べるようになり病気も治った、というのですから、まさに隔世の感があり興味深いです。第二次世界大戦のさなか、一九四三年（第四十三巻）三月号の「玄米食と野菜」という記事（P.42）では、「昨今油脂の配給も少ない折柄でございますので」油脂を多く含む豆類から摂取しようと書かれ、枝豆の栽培方法が詳しく教示されています。食と育児の関係ははつきりと時代を映して、逆に現代の「食育」も五〇年後にはどう見えるのか、思いをはせてみるのも有意義なことに違いありません。

文化人類学の世界で、異文化社会に入って社会の多様なあり方を記述したものを「エスノグラフィ」民族誌」と言います。こちらの価値観に相手を吸収して説明するのではなく、相手をその全体性、多様性のままに理解しようとする方法はエスノグラフィ的な方法です。雑誌の「誌」も記述されたものの集成物を意味します。「幼児の教育」という一世紀以上にわたる記録を読者が「保育誌」として対話的に読み、それぞれが「私の保育史」を過去と対話しながらイメージできたらどんなに素晴らしいでしょう。「保育誌」に込められた過去の人たちの声や遺言、思い、生活観、価値観に関心を開き、現代の保育・幼児教育にかかわる私たち自身の心的知的パースペクティヴ（地平）を新たに作る、そのような保育史研究が求められていると思います。

（お茶の水女子大学大学院准教授）